

在朝日本人二世の朝鮮・朝鮮人に対する意識形成の研究

—在釜山日本人を中心に—

曹龍淑

1. はじめに

「在朝日本人」とは19世紀後半の釜山開港（1876年）以降、日本の敗戦（1945年）までの時期に、朝鮮に居住していた日本人の総称である¹⁾。既存の植民地史研究の多くが、日本からの資本の流れがいかに統治に対して影響を及ぼしたのか、あるいはいかなる制度で統治を効率的に行い、強化したのかという側面から問われたものであるのに対して、在朝日本人に着目した研究は、植民地統治に携わった人的側面を解明しようとする試みから定立されたものである²⁾。但し、とりわけ総督府官吏など直接的に統治を担ったものたちではなく、いわゆる「下からの侵略」「草の根の侵略」という観点を背景に宿しつつ行われてきたのがこの研究の特徴である³⁾。

本稿はそうした先行研究を活用しつつ、またそれに連なる研究であることは言うまでもない。そして在朝日本人という存在が朝鮮植民地統治、あるいはその後の韓国社会、さらには日本社会に対してどのような影響を及ぼしたのだろうかということに関心を注いでいる。しかし、在朝日本人研究は在朝日本人の実態に関しても、彼・彼女らの「意識」がいかに形成され、いかなるものであるのかに関しても、それを描き出すまでに至っていない⁴⁾。そのため、本稿の課題は「植民者」として位置づけられるところの在朝日本人が植民地朝鮮においていかなる役割を担い、どのような影響を及ぼしたのかという考察へと至る前段階の基礎作業として、在朝日本人が自らの植民地経験をいかなる形で捉え、いかに語っているのか、またその際、朝鮮・朝鮮人をどのように把握していたのかを比較的長いタイムスパンから考察することとする。彼・彼女らの意識形成の過程を朝鮮在在時から日本へ帰還し、同窓会を組織して活動するまでという比較的長いタイムスパンでみるのは、彼・彼

女らの「内的葛藤」及びその要因に着目したいためである。

従って、以下本稿では在朝日本人らが意識形成を行う背景となるであろう在朝日本人社会について、生活様態、教育状況を中心に詳述する。その上で、朝鮮在住時、日本への帰還後、現在の社会により良く適応するためにいかなる心の動き—意識形成—を経てきたのかを分析する。その際、本稿では分析資料の中心をなすものとして、在朝日本人二世らの集い（同窓会）から発行された回想記（『幻の名門校』）や会報（『龍頭山』）を用いるとともに⁵⁾、筆者が自ら行ったアンケート調査⁶⁾で補強・検証するという方法を採用する。その結果として、在朝日本人の朝鮮・朝鮮人に対する意識としてどのようなことが言えるのかをまとめ、今後の課題を提示したい。

ここで、「二世」を積極的に取り上げる理由について述べたい。既存の在朝日本人研究で「一世」と「二世」とを区別して論じた研究は、高の著作を除けば皆無に近い。だが、本論で詳述するように、「二世」たちは朝鮮に対する素朴な故郷感情を持っていることが特徴的であり、かつ植民地に対する感情においても、明らかに「一世」とは異なった認識を保有している。それは恐らく、出自においても、自己の意識を形成する学齢期の生活環境においても「一世」とは異なるからであろう。そうした研究上の理由に加えて、資料的制約並びに「二世」の方々の多くがご存命であり、植民地の生き証人であるという理由から、本稿では「二世」を取り上げる。

最後に、二点ほど予め断っておかねばならないことがある。まず、本稿では在朝日本人の存在及び意識が植民地朝鮮（または、それ以後の韓国・日本社会）においてどのような役割を担ったのか、またいかなる影響を及ぼしたのかという機能的側面に対して常に関心を持ちつつも、それ自体についての検討は行っていない。そのため、彼・彼女らの存在や意識に対する歴史的評価や解釈を行うという観点は欠落している。それゆえ、本稿で明らかにされる在朝日本人の意識が植民地統治という韓国人にとっても、日本人にとっても、負の遺産でありながら、そうした歴史的側面を反映しない一面的なものとなるかもしれない。しかし、既述のように、本稿の目的は在朝日本人の意識がどのようなものであるかをできる限り客観的に描き出そうとすることである。彼・彼女らの意識がいかに形成されたのかということと、その意識がど

のように表出され影響を及ぼしたかということとは、連続性を持ちつつも別の問題であると考えからである。

次に、当然ながら、分析によって得られた在朝日本人二世の意識をそのまま備えた典型的人間が実際に存在するわけではない。あくまで在朝日本人二世集団の傾向として考察するものであり、それゆえこの基礎作業を経て、植民地統治と在朝日本人との関係を初めて問うことができると考えるのである。

2. 在朝日本人社会

(1) 在朝日本人社会の概況

日本が朝鮮の釜山を開港せしめた明治9年(1876年)当時、54名に過ぎなかった在朝日本人の人口は、日露戦争が終結した明治38年(1905年)に4万名を越え、日本が韓国を併合した明治43年(1910年)には17万名強に達した。続いて、終戦の前年にはその人口が71万余名に上った(53ページの表1を参照)。その在朝日本人人口の男女構成比率は男性が女性よりも常に高かったが、日露戦争以降、朝鮮を保護国化する一方で、現地の娯楽施設などが整い定住化が進むと、構成比率は平準化に向かう⁷⁾。ちなみに、昭和19年5月の統計では逆に女性が男性よりも2万人ほど多くなっているが、これは戦時召集によって男性が朝鮮を離れたためである⁸⁾。

在朝日本人人口の基本的な動態を内地の出身地別にみると、植民地統治時代の全時期を通じて大きな変動はなく、朝鮮に近い九州・中国地方出身者が圧倒的に多い。割合的には、九州が全体の三分の一以上、中国地方が全体の約五分の一以上を占めており、これを都道府県別でみても、順位の上位は九州・中国地方の県によって占められている⁹⁾。

朝鮮における日本人の居住地を人口の多い道別にみると、京畿道、慶尚南道、咸鏡北道、咸鏡南道の順になっている。朝鮮人、日本人、外国人を合わせた人口総数に対する日本人人口の割合をみると、もっとも多い道は咸鏡北道である。都市別にみると、京畿道の京城、仁川や慶尚南道の釜山、咸鏡南道の元山、咸興、興南、咸鏡北道の清津に日本人が多い¹⁰⁾。しかしながら、植民地末期においては咸鏡南・北道をはじめ北朝鮮地域で日本人の数が顕著に急増する。これは日本の軍需工業化政策並びに満州に対する政策に関連す

表1 朝鮮在住日本人人口および戸数（明治9年～昭和19年）

年	総数	男	女	年	総数	男	女	戸数
明治9	54	52	2	明治43	171,543	92,751	78,792	50,992
10	345	320	25	大正1	243,729	131,518	112,211	70,688
11	117	18	99	3	291,217	156,149	136,068	83,406
12	169	139	30	5	320,938	171,713	149,225	90,350
14	3,417	2,831	586	7	336,872	179,686	157,186	93,626
16	4,003	3,284	719	9	347,850	185,196	162,654	94,514
18	4,521	3,710	811	11	386,493	204,883	181,610	106,991
20	641	468	173	13	411,595	216,429	195,166	111,919
22	5,589	3,494	2,095	14	443,402	242,158	201,244	113,254
24	9,021	5,601	3,420	昭和1	442,326	230,228	212,098	117,001
26	8,871	5,168	3,703	3	469,043	243,384	225,659	122,773
28	12,303	7,315	4,988	5	527,016	285,966	241,050	126,312
30	13,615	7,871	5,744	7	523,452	268,311	255,141	129,948
32	15,068	8,507	6,561	9	561,384	287,964	273,420	141,417
34	17,928	9,957	7,971	11	608,989	313,211	295,778	152,891
36	29,197	16,888	12,309	13	633,320	323,210	310,110	158,843
38	42,460	26,486	15,974	15	707,742	374,212	333,530	165,900
40	98,001	55,669	42,331	17	752,823	385,325	367,498	179,349
42	146,147	79,947	66,200	19	712,583	345,561	367,022	

注1. 明治9年～明治42年は、朝鮮総督府調査資料第22輯「朝鮮の人口現象」による。

2. 明治43年～昭和17年の人口総数、男、女および戸数ならびに大正14、昭和5・10・15年の戸口は、朝鮮総督府「朝鮮総督府統計年報」による。

3. 昭和19年5月は、朝鮮総督府「人口調査結果報告其の一」（昭和19年9月10日刊）による。5月1日の調査である同資料には「精査の結果とは、かならずしも一致しない」と記している。

4. 大正14、昭和5・10・15・19年以外は、12月末現在の数である。

5. 大正14、昭和5・10・15年の人口総数及び男女は、同年10月1日現在の数である。大正14、昭和5・10年は、朝鮮総督府「朝鮮国勢調査報告」全鮮篇により、昭和15年は、総理府統計局「昭和25年国勢調査報告」第8巻「最終報告書」による。

[出所] 森田芳夫『朝鮮終戦の記録』巖南堂書店、1964年、2ページを参考

に筆者が簡略化し作成した。

るものと考えられる。逆に、純農村地域では日本人の占める比重は高くない。このことは、在朝日本人の大多数が基本的に都市生活者であったことを物語っている¹¹⁾。

下の表 2 から分かるように、1890 年時点で在朝日本人の最も多くが居住していたのは釜山であり、ついで仁川と元山である。これは 1876 年の日朝修好条規により、当初釜山のみが開港されたため、多くの日本人が釜山に生活基盤を形成していたからである。1907 年には京城、仁川が釜山とほぼ同水準の人口となり、1910 年には、京城の在朝日本人人口が仁川や釜山をはるかに上回った。この背景には、日韓併合で朝鮮総督府が京城に設置されることにより、政治経済の中心都市としての首都京城の役割の増大が指摘される¹²⁾。

表 2 朝鮮・居留地在留日本人数 (単位: 人)

居 留 地	1890 年	1900 年	1907 年	1910 年	1913 年
釜山	4,344	5,758	16,040	24,936	27,610
元山	680	1,578	3,633	4,636	6,966
京城	609	2,115	13,416	38,397	55,628
仁川	1,612	4,208	11,467	11,126	11,440
木浦		894	2,873	3,612	5,628
鎮南浦		339	2,729	4,199	5,234
群山		488	2,956	3,737	5,181
馬山		252	3,219	7,081	5,315
平壤		159	6,174	6,917	8,422
大邱			2,468	6,492	7,684
新義州			1,471	2,742	2,768

『日本帝国統計年鑑』各年、『韓国統監府統計年報』、『朝鮮総督府統計年報』各年より作成。

[出所] 木村健二「在外居留民の社会活動」『岩波講座 近代日本と植民地 5—膨張する帝国の人流—』1993 年、33 ページの表を筆者が簡略化し作成した。

在朝日本人の職業についてみると、昭和 17 年末の統計によれば、朝鮮の主産業である農業に携わるものが、朝鮮人の 68.1%であるのに対して、日本人は 3.9%に過ぎない。これは内地の日本人の 42.6% (但し、昭和 15 年の統計) に比べてもかなり低い数字である。今ひとつ特徴的なのは公務自由業が 39.5%を占めていることである。以下、工業 18.7%、商業 18.2%、交通業 7.2%と続く¹³⁾。公務自由業が 40%近くを占めていることは、内地の比率と比べても 5 倍以上に達する。これは朝鮮において日本人が特殊な地位を占めていた一面を物語っているが、植民地期後半の統計であるので、それ以前の時期やさらに遡って日韓併合以前の時代とは異なることに注意すべきであろう (56 ページの表 3 を参照)。

ここで、在朝日本人が朝鮮へと大量に移住することを実質的に後押しした日本の政策について簡単に触れておこう。日本政府は日本人の朝鮮への渡航と定住化に対して、様々な便宜を図った。とりわけ、日露戦争を前後して旅券の必携を免除し、兵隊検査の実施場所を朝鮮内各地に設定するなどの便宜を図った。また、文化的施設についても、高級官吏に対する舎宅や居留民に対する娯楽・慰安・衛生施設の建設、さらに祭礼・イベントなどを推奨した。在朝日本人もこれらの後援に呼応し、彼らによって結成された居留民団を中心に水道・消防・衛生組合・公園などの公共施設や組織を完備し、文化財団・劇場を設けた。日露戦争後に東京在住の官吏が数多く渡航するようになって以降は、「東京風と大阪風の融合は進み、日本人の朝鮮化・朝鮮理解も、定住化が進行して、気候風土や取引・雇用関係などの面で朝鮮的に合わせていかざるを得ないことが分かるようになり、進んでいく」¹⁴⁾。

最後に、在朝日本人の渡航背景と社会の特徴とを時期区分し概括する。1905 年から 1910 年の間を一つの基準にして、この時期以前 (以下「前期」) に日本から渡来した在朝日本人とこの時期以後 (以下「後期」) に日本から渡来した在朝日本人の間には大きな差違がみられる。

前期に朝鮮へ渡来した在朝日本人はその大部分が明治前半期の急激な資本主義化、社会変動による日本国内の生存競争からはみ出た失業者または没落商人や貧農、さらには没落士族層であった。彼らは出稼ぎや移民のために朝鮮へ渡り、朝鮮での一獲千金を夢見た人々が多数であった。日露戦争以降、

表3 朝鮮居留地在留日本人本業者別人数 (単位:人)

職 種	1897年(%)	1906年(%)	1910年(%)
官 吏	266(7.2)	2,107(6.7)	4,169(8.7)
公 吏		136(0.4)	995(2.3)
教 員	14(0.4)	181(0.6)	345(0.8)
新聞及雑誌記者			165(0.4)
神 官		5(0.0)	25(0.1)
僧侶及宣教師	8(0.2)	72(0.2)	121(0.3)
弁護士及訴訟代理人		32(0.1)	60(0.1)
医 師	11(0.3)	200(0.6)	216(0.5)
産 婆	7(0.2)	62(0.2)	121(0.3)
農 業	23(0.6)	1,063(3.4)	1,180(2.7)
商 業	1,660(45.1)	9,350(29.8)	10,884(25.3)
工 業	752(20.4)	3,858(12.3)	5,064(11.8)
漁 業	127(3.4)	793(2.5)	1,153(2.7)
雑 業	547(14.8)	6,435(20.5)	9,978(23.2)
芸娼妓酌婦	260(7.1)	2,500(8.0)	2,517(5.8)
労 力	9(0.2)	3,618(11.5)	4,705(10.9)
無職業		935(3.0)	1,397(3.2)
計	3,684(100)	31,347(100)	43,095(100)

1897年は『東邦協会会報』第38号、1897年9月、他は表1に同じ資料による。1897年は釜山、元山、京城、仁川、その他の年は木浦、鎮南浦、郡山、平壤、馬山、大邱、新義州が加わる。1897年の「官吏」が記載がなかったため、『帝国統計年鑑』所載の「公用」男子人数を使用した。

[出所] 同上、木村、34ページ。

日本の朝鮮植民地化が本格化する過程で在朝日本人社会の構造にも一種の変動が現れ、統監府とその後の朝鮮総督府体制の確立により、在朝日本人の主流は官僚及び軍人そして企業の中堅エリート・教員となり、植民地権力を頂点として朝鮮人社会の上に君臨する植民者社会が形成されたという¹⁵⁾。

また、前期に渡来した在朝日本人の行状を分析した研究によれば、彼らは朝鮮人に対して、国家の論理で完全武装した冷酷なエゴイストであり、あけすけな偏見の持ち主、差別・加害の実行者であった。日本国家の侵略の先頭に立つ朝鮮植民者が、一方では日本国家のピラミッド構造の中では被害者で

あると自分自身を意識し、そのため損な役まわりを引き受けているという気持ちちがとても強かったという¹⁶⁾。それに対して、後期に渡来した在朝日本人は単に腰掛け的にやってきたに過ぎず、朝鮮人社会とは隔絶した大都市の日本人町で「優雅に」生活していた。彼らの多くは意外なほど朝鮮の土地や人に馴染まず、良くも悪くも愛着も認識も持たずに過ごしたという¹⁷⁾。

(2) 在朝日本人の生活様態

次に、在朝日本人の生活様態に関してもう少し具体的にみておく。植民地朝鮮は在朝日本人にとって官公吏においても、技術者、教員、その他の職業の人々にとっても、内地より増給が得られる土地であった¹⁸⁾。『東邦協会会報』によれば、1897年時点での仁川と日本国内の職種別賃金を比較すると、大工が仁川80銭～115銭に対し、日本国内は44銭で、以下同様に、左官が80銭に対し、43銭、石工が80銭に対し、47銭、日傭が60銭に対し、26銭（以上は日給）、下婢が350銭～500銭に対し、下僕226銭・下婢123銭（月給）であった¹⁹⁾。このことは朝鮮内の日本人と朝鮮人の賃金についても言えた。当時、朝鮮総督府鉄道局に奉職していた下條藤雄によれば、「ソウルより北の日本人鉄道員は本給にその七〇%アップ、南の日本人鉄道員は六〇%アップでした。これを『加俸』と云いました。月給の本俸が三十円としたら、朝鮮人の月給は三十円、日本人は四十八円、五十一円でした」と回顧している²⁰⁾。

実際に、筆者が行ったアンケートでもこうした事情が伺える。まず朝鮮に渡航したきっかけ・理由に対して、経済的理由を挙げるものが半数以上を占める。次に多いのが親類を頼っての渡航という回答であるが、例えば「農家のため、貧困で、将来の夢がもてず、釜山にいた親戚を頼って行った」（1931年生、男）というように経済的理由と重なるところが多い。もう一つ特徴的なことは在朝日本人たちの暮らしぶりが比較的良かったことである。この点は先行研究でも指摘され、回想記や会報でも伺われる。また、アンケートにおいても、その半数以上が「最も良かった思い出」として、豊かな生活や遊び・旅行、平和などを挙げており、このことからその暮らしぶりの良さが伺われよう。

また、在朝日本人たちの生活様態における特質は日本人町を形成し、朝鮮人と接触しないで生活していたことである。在朝日本人たちが都市生活者であり、日本人町を形成していたことは上述したが、それを裏付けるように、アンケートでも三分の一以上が朝鮮在住時に朝鮮で親しく接した朝鮮人はいないと回答している。もちろん、親しく接した朝鮮人はいると回答したものが半数以上を占めるが、その場合でも、当時例外的に日本人学校へ入学が認められていた朝鮮人同級生や総じて朝鮮社会では生活が豊かな階層に属していたと思われる近所の人々を挙げたものが多い²¹⁾。

以上をまとめるなら、在朝日本人二世たちの生活様態について次のように言えるであろう。彼・彼女らは当地の朝鮮人と交わることなく、日本式の生活を、しかも内地よりも総じて比較的豊かな生活を送っていた。それは彼・彼女らの両親（あるいは祖父・祖母）が内地での生活苦境からの脱出のために朝鮮へ移住し、そこは内地より増給が得られる土地であったからである。

(3) 在朝日本人の教育動向

本節の最後に、本論で活用する資料に即して、在朝日本人の教育史・機関・実態に触れておこう。朝鮮へと渡航し居住した在朝日本人らの子弟の教育は当初からの問題となっており、釜山が開港された翌年の夏には在釜山の総代役所の一室を割いて、「共立学校」と称する教育機関が初めて設置された²²⁾。その後、明治15年に元山、明治16年に仁川が開港されるに伴い、当地へ教育施設が設置されたが、いずれも当初は仏教寺院（本願寺）の一室を借り、僧侶による「読書、習字、算術」が教授されるにすぎなかった²³⁾。

本格的に学則が発布され、内地と同様の制度が整えられたのは日韓併合に伴う明治45年のことであった。むろんそこでは、『朝鮮公立小学校規則』第9条第1項「忠君愛国の志気を発揚し忠量なる国民を育成するは小学校教育の主要なる目的なれば常に深く此に注意すへし」とあるように、「忠君愛国」「国民の育成」が強調された。ただし、同じ第3項では、「…土地の状況に適應せむことに注意すへし」とあり、朝鮮の状況を鑑みることを指摘しているが、それが教育内容や指導に反映された形跡はない²⁴⁾。

その後、大正11年には朝鮮新教育令が発布され、「朝鮮にある国民は内鮮

人を問はず同一の教育を受くることになった」が²⁵⁾、「朝鮮の国民中には現実に於て言語風俗習慣の同じからざるものがある」との理由から、「普通教育に於ては国語を常用するものと然らざるものとを区別の標準として」、一般的に日本人の子弟は小学校、中学校、高等中学校に通い、朝鮮人は普通学校、高等普通学校、女子高等普通学校に通うという具合に、日本人と朝鮮人とは区別された²⁶⁾。

本稿において検討される釜山では、上述の通り、開港後まもなくの明治 10 年に朝鮮初の在朝日本人子弟に対する初等教育機関である「共立学校」が設立され、それが後身の「釜山第一公立尋常小学校」となる。その後、大正 2 年には中等教育機関である釜山公立中学校が創立された。大正 15 年 5 月末現在の統計によれば、釜山に小学校が 8 校、105 学級、児童が 5,392 名在籍しており、中学校が 3 校、37 学級、生徒数が 1,735 名にのぼり、その他に園児や補習学校生を加えた総合計は 16 校、164 学級、7,849 名であった²⁷⁾。

そうした規模で行われていた在朝日本人の教育であったが、回想記や会報などを通読してみると、意外にも教育内容に関する外地独特の描写は伺えない。同窓会の回想録という体裁であるから至極当然のことながら、母校を取り上げた思い出の記が多く、軍事教練の思い出や戦前教育の優秀さなどを指摘するものが多い。このことは「現在」から見れば異質な体験であるが、とりたてて外地で教育を受けたのもたちの回想記でなくとも、同世代ならば同様であろう。そのことから見ても内地教育と変わらない教育を受けていたことが伺われる。

以上の事柄をまとめれば、在朝日本人の教育は内地と同様の国民教育が図られ、それは法的にも、制度的にも実施された。また、日本人と朝鮮人を学校の名称、すなわち通学する学校自体を区別し、「併合」「内鮮一体」と言いつつ、日本人と朝鮮人との人的な相互浸透は行われなかった。こうした事実は在朝日本人らが内地と何ら変わりのない学校生活を送ることに拍車をかけた。さらに、前述した日本人町の形成と重ね合わせれば、彼らは朝鮮という外地で生活しながら、常に内地を共時体験していたと言えるのである。このことはおそらく彼・彼女らの意識に多大な影響を及ぼしたであろう。

3. 意識形成の過程—在朝日本人二世の意識

(1) 「朝鮮時代」：故郷として存在していた朝鮮

朝鮮で生まれ育った在朝日本人二世は日本への引き揚げまで朝鮮を自分たちの「故郷」（自分の生まれ育っているところ）と認識していた。これは内地から渡って行った一世が既に朝鮮を「異国」として、あるいは「日本の植民地」として認識していたこととは異なる。それゆえ、敗戦を迎えた後に、日本に引き揚げなければならない状況に置かれた彼らは自分たちが生まれ育った場所から何故離れなければならないのかがよく分からなかった。つまり、在朝日本人二世と親世代との最も異なるところは、「朝鮮」を故郷であると認識しているか否かということである。一世にとって朝鮮が単なる異国であったり、日本の植民地という存在であったり、内地よりも増給が得られる場であったりするとすれば、二世にとって朝鮮は自分達が生まれ育った故郷であるということに大きな意味が置かれる。アンケートによれば、実に90%以上の者が、朝鮮在住当時「朝鮮」を何も意識していないか、自分が生まれ育っているところであると考えていた。以上のような意識を持っていた二世だが、植民地当時、時々直面する出来事により朝鮮を異国として認識させられる事態に陥り、そこで初めて複雑な心情にさらされる。

「入学後それほど経過しない頃と思うが、公設グラウンドで釜中、一商、東萊高普、二商の四校対抗の競技会が開催された時の事件が、最も印象に残っている。当時のことから、教練の服装で、銃を持っての障害物競争など戦時色の濃い種目ばかりである。各校全生徒が応援していた。競技も終わりに近づいたと思われる頃、何かの競技の判定で、東萊側から抗議があり、場内に不穏な空気が漂った。そうこうするうちに、騒然となって、「○○を殺せ」というようなことを口々に叫び、競技は続行不能となった。計画的なものとは思えないが、朝鮮人の反日感情の噴出した行動であった。〔…〕釜山で生まれ、釜山で育ち、釜山が自分の世界であったが、ここは異郷であると痛切に感じさせられた出来事であった」

28)

むしろ、こうした在朝日本人二世の意識は筆者が行ったアンケート調査においても伺われる。先に、90%以上の者が、朝鮮在住当時「朝鮮」を何も意識していないか、自分が生まれ育っているところであると考えていたと記述したが、同じ質問項目に重複する形で、「日本の植民地」と回答をした者が4名（11%）いた。また、朝鮮在住当時「朝鮮人」を同じ民族で同じ国の人であると考えた者は皆無であり、大半は違う民族であるが同じ国の人、あるいは何となく違う存在であると感じていた。さらに、朝鮮が日本の植民地であることを認識したのはいつかという質問項目では、「朝鮮に在住していた頃」と回答した者が約半数の17名（46%）にのぼった。これは先のアンケート結果と明らかに矛盾する。おそらく、家庭生活においても、学校生活においても朝鮮人との関わりを持たなかったことが故郷としての朝鮮意識と植民地という異質な朝鮮意識との断絶を容易にしたと思われる。換言すれば、朝鮮の地における内地の共時体験が異質な朝鮮・朝鮮人意識を希薄化させ、自分の生まれ育っているところにすぎないという意識との両立を可能にさせたのであろう。そのように考えれば、植民地当時、在朝日本人二世は朝鮮という存在自体に対して何の自覚もしていなかったことが読み取れる。従って、その後においても自分が生まれ育った朝鮮をどのように捉えればよいのかよく分からなかった二世は、時折直面する朝鮮人とのトラブルにより、自らの生まれ育った地に対する混乱の心情を持ったのだと考えられる。ただし、上に引用した下線部の記述「釜山で生まれ、釜山で育ち、釜山が自分の世界であったが、ここは異郷であると痛切に感じさせられた出来事であった」ことが意味するところは朝鮮を日本の植民地として、あるいは異国として認識するに至った契機として考えるのは早計であろう。それは「自分の世界」あるいは自分の存在に対する異質な他者の存在を意識し、その存在をどのように受け止めればいいのかということへの動揺にすぎなかったと捉えるべきである。

かかる二世の存在は、「中には韓国に誕生して母国の何物たるを実験せざる生徒も鮮なからざれば任に教育に在るものの最も注意すべきは、如何にして愛国心を涵養すべきやに存す」と危機感を持ち、増加しつつある二世に向

けて内地観念の鼓舞→愛国心の鼓舞→国威の発揚に努める。つまり、母国を愛慕する観念を持ち、朝鮮に新日本を建設すべく奮闘せよという発想である。国家の意向とそれに沿ったジャーナリズムの役割をよく示している」²⁹⁾との先行研究の分析からも明らかのように、日本にとっても大きな課題になっていたのである。次に引用する回想記からも朝鮮で生まれ育った二世たちのアイデンティティ確立のため、教育者の側が彼らに対して注意を払っていることが伺われる。

「四年の春の修学旅行は、従来満州行きでしたが、この目的は、卒業後は朝鮮はもとより満州支那方面で活躍すね者が多いだろうから予備知識を得するためだと聞いておりました。だが、青柳校長は、釜中生の大多数は朝鮮で生まれ育ち、むしろ内地の事情に疎いため北方に飛躍するには兵法の極意である『己を知り敵を知る』に習うて先ず内地の現状を把握しなければならぬとお考えになったようです」³⁰⁾。

従来の在朝日本人二世に対する研究では、国家の意図的政策や教育、親の影響などによって、彼らが無意識的に朝鮮は植民地であると考えようになり、そして日本の植民者として君臨するようになっていたという。だが、上記において検討したように、一世とは異なり二世は朝鮮を意識下に置かないか、単なる生まれ育ったところと考えていた。ただし時折異質な他者の存在を意識する出来事により混乱した心情を持っていたことは確かである。しかし、そうした「内的葛藤」も彼・彼女らが当地の社会によりよく適応するために意識下に押し込められていたのである。

(2) 朝鮮時代以後：「ノスタルジア」としての朝鮮

在朝日本人二世たちが記した回想記の記述の中で最も頻出する共通意識としては、朝鮮のこと、植民地統治当時のことを「郷愁」として捉えていることである。彼らは何故、どのような部分に「懐かしさ」を感じるのだろうか。

i) 故郷としての郷愁

在朝日本人二世は「生の原点である故郷としての郷愁」に「懐かしさ」を感じている。彼らにとって釜山は思い出の源泉である。例えば、下に引用した次のような記述にあらわれている。

「釜山で生まれ育った者として、テレビ等に釜山が出ると懐かしく昔を思い出しています。〔…〕釜山は、私の故郷、釜中は私の少年時代を育んでくれた人間形成の場として懐かしい思い出で一杯です」³¹⁾。

「日本人もよく口にするが、『釜山港に帰れ』のカセットテレビに映し出される釜山港の画像は、私たちが校庭から眺め続けた情景とは全く異なるものである。それは、永遠に私たちの心の中のみ生き続けることのできるものなのである」³²⁾。

つまり、「テレビ等に釜山が出ると懐かしく昔を思い出して」いるが、それは近代化や都市化された釜山ではない。また、それゆえ「私達が校庭から眺め続けた情景とは全く異なるものである」。すなわち、「生の原点である故郷」の変化は彼・彼女らの共鳴感や朝鮮観に影響を与えることはない。あくまで、朝鮮は無自覚に「郷愁」の地として措定される。それはわれわれが生まれ故郷に持つ懐かしさと変わらないものである。

ii) 自然、幼年時代の友人・先生、学校への懐かしさ

また、在朝日本人二世は「自然への懐かしさ」、「幼年時代の友人・先生・学校があった思い出の場」に対する郷愁を感じている。例えば、次のような記述にあらわれている。

「すばらしい恩師たちに教えを受けられたことも幸せであった。〔…〕戦後の教育の混沌の中でよく釜山時代を思い出し、戦前の教育はすばらしかった、特に先生は小学校を含めて優れた方が多かったとつくづく感じ入ったものである」³³⁾。

「今にして思えば、釜中時代の少年期、あの時期が一番私にとっては貴重な時期であったように思う。戦時中とはいつでも、後に体験した程の物資不足とか、戦争の切実感はなく、大らかな平和な時世の中で、良い恩師や、心の通じ合う友人に恵まれて、スクスクと伸びた時間だった。〔…〕私自身の心身にいろいろな物を芽ばえさせ、育て上げてくれたのだ」³⁴⁾。

「これからは、在りし日の釜山の山や海、そして清き空と釜中の思い出と共にまだまだ頑張っていきたいと思っている」³⁵⁾。

「釜山での生活は私の少年期の全てである。海あり、山あり、河も温泉もあった。人も風物もみな懐かしい思い出に結びつき、還暦を経た今日でも、釜山、釜中と聞くと、何か熱いものがこみ上げてくる」³⁶⁾。

このことはアンケートの結果にも表れている。90%以上のものが朝鮮を懐かしく感じると答え、「どんな理由から懐かしさを感じるか」との追跡質問に対して、70%以上のものが何らかの形で、故郷への郷愁、幼少期の思い出により懐かしさを感じると回答した。また、その具体的な情景としては遊び・旅行によって触れた山河や自然、学校生活などである。

こうした、彼・彼女らの回想は、高も指摘しているように、後年感じたであろう朝鮮に対する後ろめたさから、「朝鮮を『懐かしいと言ってはならぬ』という立場からすれば、旗田の姿勢 [本論に即して言えば、上記のように回想した彼・彼女らの姿勢—筆者註]は必ずしも肯定されるべきものではない。しかし生の原点であり、『自己』の一部であった朝鮮を懐かしく思う気持ちを、抑圧することだけでよしとすべきなのだろうか」³⁷⁾ とひとまず言える。

だが、ここに表れているのは懐かしさを抑圧するどころか、率直かつ無邪気に故郷や自然、そして学友や恩師、学び舎を懐かしむ姿である。もちろん、それが語れている場が幼・少年時代を共有した同じ過去を併せ持つ者達の集いであり、そうした気軽さの中で語られたということについては注意を払わ

なければならないであろう。しかし、在朝日本人二世たちの多くが一世たちとは異なる形で朝鮮を想起したことと同様に、朝鮮に対する後ろめたさ、すなわち植民地に対する判断は自らの意志とは無関係のことであり、かつまた当時の実感として希薄であるがゆえに、当時の懐かしさに対する語りとして入り込む余地はない。ところが、こうした一方で現在から朝鮮以後（過去の記憶としての引き揚げ以後）を語る時、彼・彼女らの意識は複雑（内的葛藤）なものであることが明らかになる。

iii) <植民地マイナス（－）意識>と<植民地プラス（＋）意識>の 交差³⁸⁾

①植民地マイナス（－）意識

日本に引き揚げてから朝鮮が日本の植民地であったことを認識するようになった在朝日本人二世たちの意識は他の日本人と異なると思われる。当時は何の意識も持たず朝鮮で普通の生活をしていたのに、後日気付いて見たら自分の生まれ育った朝鮮が日本の植民地であったこと、この事実は彼らを苦しめることにもなる。このことに関する記述を拾い出してみると以下のようである。

「なぜ日本は無暴な戦争に突入したのだろうか。生まれ育つたふるさと釜山を失い、また釜山第六小学校・釜山中学校の二つの母校をも失ってしまった。戦争の混乱期、復興期、高度成長期を経て、現在の日本は経済的繁栄を謳歌しているが、これからの日本は経済大国としての国際的責任が問われる時代となった。戦争のないこの四十年間がいかに大切なものか痛感、平和な時代がいつまでも続いてほしいと念じている」³⁹⁾

「[...] 次に想いが別の問題になりますが、当時の韓国人と日本人の差別問題です。今から考えますと確かにあったことではないでしょうか。強制的な日本名への創氏改名、日常会話及び学校での韓国語禁止、韓国人居住街の分離等、又当時私も子供でしたので余り関心もありませんでしたが、現業関

係の従事者は殆んど韓国の方であった様な気がします。[…]
以上の小さな日常行為が、目に見えない精神的な差別でなかつたか
かと思ひ、幾ら親の時代のこととは云え、一日本人として反省とお詫びの
気持ちで一杯です」⁴⁰⁾。

自己による選択でないにもかかわらず、朝鮮で生まれ何の自覚もせず普通の生活をしていた在朝日本人二世にとって、自分の存在自体が日本の植民者として位置づけざるを得なくなった時、後ろめたさを感じ、日本の植民地統治に対する反省の心情も抱くようになる。上の下線部「小さな日常行為が、目に見えない精神的な差別でなかつたかと思ひ、幾ら親の時代のこととは云え、一日本人として反省とお詫びの気持ちで一杯です」と吐露しているように、直接的に植民地統治の官吏として貢献したわけではないが、普通の生活自体が、植民地統治構造の中に存在していたことを語り、自分を反省すべき日本人として位置づけている。また同時に、「無暴な戦争」と言い、「母校をも失つ」たと、自分をも被害者として捉えながら、日本植民地統治を批判することもある。

②植民地プラス (+) 意識

その一方で、植民地肯定の立場を見せる在朝日本人二世もいる。次にかか
る態度がどのように表われているのかをみってみる。

「日韓合併以前韓国はすでに清国の支配下にあり、又不凍港を求め南進政策を進めてゐた帝政ロシアに領有されていたかも知れない。このことも日清、日露の二大戦争の原因になつてゐる。又韓国社会は、両班（ヤンバン）中人（チューイン）常人（サイン）奴婢（ノビ）のきびしい階級制度が有り、一般大衆は実に苦しい日々を送つてゐたのである。日韓合併による朝鮮総督府の第一の努力は、朝鮮人の教育だつたと思ふ。[…] 日韓合併以前、釜山はすでに完全な日本人町になつてゐたが、日本が韓国を合併せず、保護国程度にしてゐたら、我々釜山子は終戦により追出されずに今も釜山に居て、朝鮮の発展の為、貢

献出来てゐるのではないかと思はれる」⁴¹⁾。

「一年生の一年間は、太平洋戦争開戦の前後であったため、軍事教練とか体力章検定等にかかりの時間が割かれた他は、授業も平常通りに行われた。〔…〕勤労働員は、おおむね辛い事が多かったが、いま振りかえってみて結構懐かしく思い出される事も幾つかある。〔…〕まさに、疲労と空腹の数年だったが、今にして思えば、その時の体験が、戦後の混乱と困難の時代を、へこたれる事もなく切り抜けて、今日の豊かな日本を築く原動力となったのだと思うと、誠に得難い体験を為し得た事を神に感謝しなければならぬのかも知れない」⁴²⁾。

上のように、日本の植民地統治自体を明確に肯定する在朝日本人二世の回想記は、しかしながら、自分の植民地体験、例えば、軍事教練や戦争遂行のための勤労働員などの経験が植民地の構造の中から行われたにもかかわらず、自分の個人的な体験としてのみ捉えているところが特徴的である。二世が植民地体験を語る目的・意義はさしあたり、「今にして思えば、その時の体験が、戦後の混乱と困難の時代を、へこたれる事もなく切り抜けて、今日の豊かな日本を築く原動力となったのだと思うと、誠に得難い体験を為し得た事を神に感謝しなければならぬのかも知れない」という記述からも読み取れる。つまり、現在の自らの存在を肯定すること、すなわち意識にのぼった朝鮮体験が社会により良く適応するためになされたことであると肯定するために過去の経験が寄与したということを強調したいがためであろう。このことは既存の研究で意味づけられてきた在朝日本人の持つ「日本植民者としての意識」とは言えない部分があると思われる。

以上、在朝日本人二世の朝鮮＝過去に対して感じる「郷愁」は共通しているものの、自分が生まれ育ったところが植民地であったという事実に対する意見には差異があることを明らかにした。一方では、「植民地マイナス（－）意識」的に自らを位置づけるものがある。敷衍すれば、自らをも植民地の被害者であると捉えつつ、それを踏まえた上で後ろめたさを感じながら、謝罪感情を持つのである。それは自分自身の存在を問う際には、否定の否定が肯

定になる作用を働かせる。これとは逆に「植民地プラス (+) 意識」的な考えを持つものがある。同じく敷衍すれば、この場合も自分自身の存在は肯定的である。従って、ここで重要なことは二世が自らを植民者として意識するかどうかという問題よりも、彼らが朝鮮のこと、過去のことに関心を巡らす時、あるいは自分自身の存在を客観化しようとする時、その過程には好悪を超えた、自らの境遇に対する葛藤を巡って複雑な心情にさらされるということに注目すべきだということであろう。彼らはおそらく朝鮮という土地、あるいは朝鮮人という存在をその都度、社会により良く適応するために意識にのぼせたり、取り下げたりしたのであろう。また、それに加えて注目すべきは、二世が自ら過去のことを語るようになったというよりも、集いなどを通じて過去を語るようになり、自分の存在に関して考えるようになったということである。このことは彼・彼女らの自己存在の肯定論が同じ境遇の集団間でしか持ち得ない限界性と脆さを示唆している。

(3) 拡大され・甦えるノスタルジア

i) 「ニュー釜山会」の活動を通じて

在朝日本人二世たちは、朝鮮で生まれ育ったという出自のゆえに、一方で幼少期の思い出に対する切なさを、他方で<植民地の子>として朝鮮で生まれたという自分の出自への後ろめたさを背負って生きざるを得ない内的葛藤を内在した存在となったのであろう⁴³⁾。『アカシアの大連』で芥川賞を受賞した清岡卓行は、“書く”行為を通じて旧植民地を自らのノスタルジーの地とするような一定のイメージを形成していった。同様に、多くの在朝日本人二世たちは、同じ記憶を共有するもののみで構成された同窓会や親睦会など様々な集いの場を通して朝鮮へのノスタルジアをより強化していくのではないだろうか。川村は、過去を懐かしむゆとりなど殆どなかった二世たちは「時の経過とともに、かつての悲喜こもごもの体験が、ふとしたことから浮び上がってくることもあった」と記述している⁴⁴⁾。ここでは、「ニュー釜山会」の活動を取り上げて在朝日本人二世たちの朝鮮に対するイメージがどのように現れているのか、またどのように拡大していくのかをみてみることにする。

「ニュー釜山会」は様々な活動を行っている。主要な活動を挙げれば、里

帰り旅行（各出身校親善訪問、母校への記念品贈呈、日韓合同同窓会の開催、旧住居訪問、釜山各小学校の校長との交流など）、＜望郷釜山の歌＞の製作、練習曲カセットの頒布、などである。例えば、「釜山へ里帰り旅行ご案内」について、次のように記述している。

「会員の皆様、大変お待たせ致しました！ 予てから、会員皆様より、第二の故郷釜山への里帰りの旅行の希望が寄せられて居りましたが、事務局では、終戦引き揚げから今年が五十年に当り、その記念行事の一環として釜山里帰り旅行を企画致しました。終戦の混乱の中で、悲惨な引き揚げの際、幾度も振り返った、私達が生まれ育った母校や幼時から遊び廻った近所の町の景色を今でも夢に見る会員は多い事でしょう。特に同窓生として、同じ窓から見た同じ風景を夫々のアルバムに収め幼かった頃の心象風景が重なり合う幼友達と一緒に、懐しい母校や昔の思い出を釜山の街の片隅に訪ねませんか」
45)。

また、この里帰り旅行に参加した女性は、この旅行の感想を次のように記している。

「旧南富民町旧我が家訪問。これが此の度の一番の目的でした。ほとんど昔の姿を残している我が家は健在でした。門の前でスナップを撮って貰いこれで満足ですと言いましたら、李先生と金嶋さんが声をかけて下さり、思いがけず住んで居られる韓国のご夫婦の方が出てこられ、奥さんがコンニチワと流ちょうな日本語で挨拶され驚きました。今は韓国の方のお宅で有る事も忘れ、お座敷迄上がらせて戴き、磨き上げられ手入れされている昔のままの室内を見せて戴き、最高の喜びでした。玄関前で記念写真も心良く笑顔で応じて下さり、韓国のご夫婦と私と三人でカメラマンの方に撮影して貰いまし

た。此の写真は生涯私の宝物として大切に致します」⁴⁶⁾。

旧住居訪問をしてきた男性は、〈原点にかえる〉という感想を寄せ、次のように述べている。

「さらば釜山よ また来る日まで しばし別れの涙がにじむ”
〔…〕私が育った駅前の大倉町四丁目森山旅館も、東大新町二丁目の家も跡かたもなく、わずかに四十段の階段で“この辺だろう”“総合グラウンドがここだから、高速見水源池はないが、わが家はこの辺だったろう”と見当をつける位しかないのだが…。また来年も来ようと思う。“私が今あるのも、ここで育てられたからだ。あの時、あの先生と、あの友達と、こんな話しをしたっけ、あんなこともあった”想いは五十数年前にすぐ逆のぼる。この気持ちをよみがえらせたために私はニュー釜山会の里帰り旅行に参加しているのである。〔…〕何時ものことですが、私は釜山滞在中、ほとんど連日お酒を飲んでいましたが、これは、頭の中にもう昔日の思い出が浮んでくるからで、自分の生の原点にもどったという、一種やるせない気持ちの表現でしょう」⁴⁷⁾。

「旧住居訪問」は、里帰り旅行の中の一つのプログラムでもある。以上の記述からも分かるように、自分が生まれ育った「家」を訪問することによって、彼らの過去の思い出を現在に呼び戻しているのである。つまり、過去への懐かしさが甦ると同時に甦らせるのである。

また、ニュー釜山会では年中行事として各出身校と様々交流を行っている。例えば、「各出身校(小学)親善訪問」、「母校への記念品贈呈」、「日韓合同同窓会の開催」などであるが、これも彼らの懐かしさを拡大させるのに重要な活動となる。「各出身校(小学)親善訪問」のことを次のように記述している。

「到着の夜のコモドホテルでの招待晩餐会は、〔…〕寄付金

贈呈及び記念品贈呈式等が行われる。片山会長の挨拶、乾杯で始まり盛大なパーティであった。〔…〕翌日は各出身校の表敬訪問である。〔…〕各小学校とも校門には歓迎の横断幕あり、玄関には歓迎の看板有りで大変な歓迎である。校長先生を始め職員方、又児童及びPTA父兄の方々の歓迎には感謝、感激であった。特に児童の器楽の演奏やPTAのご婦人方の合唱は素晴らしかった。アリランの合唱ではなつかしさのあまり、みんなで口ずさみ踊りだし、知らず知らずに涙が頬を伝わるのをおぼえた」⁴⁸⁾。

自分の母校を訪問し、学校の人々と様々な交流を行うことによって二世たちの過去への郷愁はより深くなることが分かる。「日韓合同同窓会の開催」に参加したある女性は、「十一月六日夜、三小講堂で現地の同窓生と、日本からの卒業生が計二百人以上集まったの初の同窓会は全国的に大変な反響を呼んだ」という文章を書いているが⁴⁹⁾、自分たちの活動が社会からも注目を集めたという事実が彼らをより積極的に過去へと結ばせることにもなるのである。「ニュー釜山会」では、会独自に「望郷釜山の歌」を製作し、それを練習曲カセットとして頒布している。望郷歌は卒業生で会のメンバーが作詞を手がけ、歌唱した曲であるが、この望郷歌も在朝日本人二世たちの思い出を深めさせる一つの要素になっていると思われる。ある女性は望郷歌についての感想を次のように記述しているが、望郷歌は自分が生まれ育った場所への愛情を深めさせ、さらに言えば過去の懐かしさをより強化させていることが読み取れる。

「曲が流れ、歌がのった時、最初にフツと涙ぐんだの。気がゆるんで了った。引揚げ以来緊張して、別な自分ばかり外に見せて来た。何か内地を警戒してた。それがとれて了ったのネ。〔…〕植民地政策、敗戦、ザンゲ、？それが一体何のサ。みんなミンナけっ飛ばせ。釜山は生きているんだボク達は―“釜山と一声聞くだけで”なのヨ。〔…〕日本とは、内地とは、

マカ不思議な所ネ。どうしても内地になじめない私の心、その原因が今回あなたのテープで初めて分りました。(内地はセマいのネ。私達大陸育ち、港町育ちには)⁵⁰⁾。

また、上記以外にも、「釜山案内地図販売」「釜山訪問のビデオ」を頒布しているが、これらも集いの様々な活動自体が在朝日本人達を過去へ浸らせる一役を担っている。

「今は異国となっている釜山にかかわる会は言いようもなくなつかしい。あの町、この町、あの人、この人。うれしいことも悲しいことも思い出はいっぱいある。そして、その思い出の中に、なつかしいという気持ちだけでなく、意外なよろこびと生き甲斐が生まれてくることを感ずる。それは、もはや老いを生きていく上での新しい活力であり、エネルギーとなっているように思う。新しい発見である」⁵¹⁾。

「戦後、呼吸の大分に帰ってからも釜山のこと、第三小学校、釜山中学のことは片時も忘れたことはないが、平素は生活に忙殺されて心の奥に大切に蔵っていたのである。しかし、大分での亀峰会の集いは年に盛会となり、会の時は釜山時代の話して感激し、これまで大切に蔵っていたことをすべて吐き出して満足している」⁵²⁾。

ii) 自分史を紡ぐために

在朝日本人二世たちは、どのような理由から自らの過去へと遡り、それを懐かしむのだろうか。「人は老年期に入ると、自らの人生の統合という課題に向かって、ますます過去を振り返り内省的になり、幼年期の記憶がよりはっきり甦る場合がある」という⁵³⁾。回想記を発行し、同窓会という一時代の記憶を共有するものたちとの集いの中で、在朝日本人二世たちが個々に今まで省みることのなかった自らの「朝鮮時代」を振り返ることは、自らが納得して解釈のできる歴史(自分史)を紡ごうとしている過程と思われる。

もちろん、在朝日本人二世たちの場合には、普通誰もが持っている故郷に対する記憶や思い出とは異なる側面が存在する。それは自己の生まれ育った場所が自国の支配下に置かれた植民地であったという事実、そして故郷が自分の意思とは無関係に突然異国となっていたことが大きく影響しているだろう。このことは彼・彼女らが自らの過去を解釈しようとするとき、それを困難にさせ、内的葛藤へと導いている一因といえる。だがそれゆえに、在朝日本人二世たちは自らの故郷を問い、彼・彼女らの集いである同窓会は自らの人生の統合という課題＝自分史を紡ぐ作業、換言すれば、内的葛藤を克服し、自らが社会によりよく適応するためにその都度形成してきた意識の正当化を促進させる役割をする。過去を語り、里帰りをし、自分の旧住居を訪ね、そして母校を訪問するなど、自分の一部である朝鮮は自分史を紡がせる作業を囿らせる鏡のような存在として捉えられる。そうして結局、過去の記憶の中で後ろめたさを感じながら自分を反省すべき日本人として位置づける人も、自分を日本の植民者として位置づける人も、傍観者的な立場で過去を眺める人も、最後に帰結するのは日本と韓国の友好関係を願うことである⁵⁴⁾。

4. おわりに—まとめと今後の課題

以上、在朝日本人二世の集いから発行された『幻の名門校』と会報『龍頭山』の二つの回想記、及びアンケートを通して、彼らの朝鮮・朝鮮人に対する意識を検討してきた。

在朝日本人二世は彼らの親世代である一世とは異なり、自分の意志とは無関係に朝鮮で生まれ育ち、日本の植民者として位置づけられることを余儀なくされた。彼・彼女らが成長するにつれ、徐々に朝鮮が日本の一部であることを意識し、動揺したにせよ、二世はあくまで当時朝鮮を単なる自分が生まれ育ったところとしてしか捉えきれていなかった。換言すれば、時折直面する出来事により朝鮮を異国として認識する場面に遭遇することがあったにもかかわらず、その意識は環境と自らの意識調整により、自覚されないままであった。終戦を迎え日本に引き揚げてきた在朝日本人二世は、様々な集いを形成し、過去への懐かしさを交わすようになり、そうした集いは多くの在朝日本人たちに懐かしさを感じさせる契機になる。在朝日本人二世の懐かしさ

は、単なる過去への〈懐かしさ〉ではなく、集いの活動を通して〈甦らせかつ甦った懐かしさ〉であると言えよう。しかしながら、一方で彼・彼女らが植民地朝鮮を思うとき、その意識は植民地マイナス（-）意識、植民地プラス（+）意識に分化する。また、二世が過去を語り、多様な形で過去を懐かしむ背景や意図は、自らの歴史を納得して解釈し、紡いでいこうとするもの、すなわち自らの人生の統合を通じて、内的葛藤を克服し、自らが社会によりよく適応するためにその都度形成してきた意識の正当化を行うためのものである。

梶村は、「今日の日本のあちこちで、相変わらず、昔どこそこに住んでいた人々の会、どこそこの学校の同窓会という形で、もと在朝日本人の集まりが無数に持たれているが、それらは全て『古きよき朝鮮』への郷愁と植民者意識を温め合う場でしかない。そして、それらは決して単純な形で後継ぎを持たない宿命にあり、もはや相当に老化しはじめてもいる」⁵⁵⁾ と言い、あるいは「今日の数多くの植民者の同窓会は、まさにこの矮小な自己に執着する思想の、そのまま化石した姿であるといえよう。植民者の自己否定の問題だけを繰り返し書き続けた故小林勝の『朝鮮をなつかしいといつてはならぬ』という言葉は、そこにまっすぐ向けられている。植民者の歴史的体験の再生の回路はこの言葉のなかにだけ含まれている」⁵⁶⁾ と述べている。だが、在朝日本人二世の同窓会を通して分かったことは、梶村が言うように断言することができないということである。在朝日本人二世にとって同窓会は、梶村の言う「植民者意識を温め合う場」ではなく、彼らの「自分史を紡ごうとする場」としての意味が大きい。また、在朝日本人二世にとって「懐かしさ」は、単なる「古き良き日本」への懐かしさではなく、自らの生の原点である故郷、幼年時代の自然や友人、そして学校に対する懐かしさである。

自分が生まれ育った朝鮮＝韓国、故郷を植民地として統治していた自分の国である日本との間で感じられる複雑な気持ちを、日韓友好関係を通して統合しようとしていた。そうした役割を果たしており、また託している存在が同窓会であるのだといえよう。

しかし、そのように総括できるとはいえ、彼らの存在そのもの及び彼らが植民地朝鮮に暮らしていたという事実は日本の朝鮮植民地統治、あるいはそ

の後の韓国社会、さらには日本社会に対して大きな影響を与えていたと思われる。たとえば、日本人町で日本式の豊かな生活を送っていたということ、そして朝鮮人と人的相互浸透しない形で教育が行われたことは支配・被支配の二重構造の形成を促した要因であると考えられるからである。

このように、彼・彼女らの存在から朝鮮の植民地統治をどのように考えるかは非常に重要な問題でありながら、資料面、その他の面でまだまだ克服しなければならない課題は多い。今後、本稿の分析を踏まえううえで、関連資料の収集、専門諸領域のさらなる研鑽を経て、他日に期したいと思う。

註

- 1) とはいえ、「在朝日本人」は明確に定義される存在ではない。それは一方で「朝鮮在留日本人」（木村健二）と簡明に定義されることもあれば、他方で「朝鮮における植民者、すなわち日本帝国主義による植民地化過程及び植民地支配下の朝鮮に在住した日本植民者」（咲本和子）と定義されることもある。つまり、在朝日本人のいかなる側面に焦点をあてるかにより、様々な定義づけが可能で複雑な存在であると言えよう。実際に、在朝日本人をどの程度の範囲で把握すればよいかを考えてみても、生活拠点が朝鮮にあったものたちは全て含めてよいかどうか、内地に留学しているものはどのように扱えばいいのかなど、不確定にならざるを得ない要因は多い。また、植民者として捉えるといっても、それには時間的制約を考慮しなければならないし、その視点には明らかに「下からの侵略」といった実証性のない二分法的な負の観点が入り込まざるを得ない。従って、本稿では在朝日本人を「朝鮮に在住していた日本人」と大まかに定義し、彼・彼女らの子女で、朝鮮に生まれ、朝鮮に育った「在朝日本人二世」に焦点をあてて考察しようと思う。ここで、二世を積極的に取り上げる理由は後述してある。また、同様の理由から、本稿では主として植民地統治期を通じて敗戦まで釜山に在住していた日本人を対象にしている。
- 2) 木村健二『在朝日本人の社会史』未来社、1989年、8-9ページ、咲本和子『『皇民化』政策期の在朝日本人—京城女子師範学校を中心に—』『国際関係学研究』（津田塾大学）No. 25、1998年、79-80ページ。

- 3) こうした観点に基づく、在朝日本人に関する先行研究には註で挙げたものの他に以下のようなものがある。梶村秀樹「植民地と日本人」『日本生活文化史第8巻—生活の中の国家』河出書房新社、1974年。梶村秀樹「植民地朝鮮での日本人」『地方文化の生活史第9巻—地方デモクラシーと戦争』文一総合出版、1978年。
- 4) ここでは、「意識」は認識と行動とに影響を与える心の動きとして捉えた。なお、「意識」については、井筒俊彦『意識と本質—精神的東洋を求めて—』岩波書店、1983年、5ページ、荻坂直行『意識とは何か—科学の新たな挑戦—』(岩波科学ライブラリー36)岩波書店、1996年、12-14ページを参照のこと。また、具体的な「意識」の分析に関しては、五十嵐徳子『現代ロシア人の意識構造』大阪大学出版会、1999年に示唆を受けた。
- 5) 回想記は釜山公立中学校の同窓会である亀峰会が編集した亀峰会編『幻の名門校(釜山中学回想記)』リベラル社、1988年を用いた。以下同回想記から引用する場合には、書名(『幻の名門校』)とページ数のみ表記する。また、会報は釜山所在の小学校の合同同窓会であるニュー釜山会が編集・発行している『龍頭山』(1992年に創刊され、毎年発行。現在まで15号刊行)を用いた。以下、同会報から引用する場合には、タイトル、号数とページ数のみ表記する。
- 6) アンケートは2002年7月1日～15日にかけて、中国地方在住の在朝日本人第19回～25回小学校卒業生61名をニュー釜山会名簿より抽出し、郵送で行った。有効回答数37名(全体の60.7%)、男17名、女20名であり、生年の幅は1926年生～1937年生である。従って、アンケートに回答を寄せて下さった方々の終戦時の年齢幅は8歳～19歳であり、彼・彼女らの植民地朝鮮体験は学齢時のものであると言える。以下、アンケート結果から引用する場合には本文中にそれを示し、個別的なものはカッコ書きで生年と性別のみを記す。なお、アンケート調査の具体的な項目などについては紙幅の関係上省略した。
- 7) 木村健二「朝鮮居留地における日本人の生活態様」『一橋論叢』第115巻第2号、1996年2月号、396ページ。
- 8) 森田芳夫『朝鮮終戦の記録』巖南堂書店、1964年、1ページ。

- 9) 同上、3, 6 ページ。
- 10) 同上、3-4, 7-11 ページ。
- 11) 梶村秀樹『梶村秀樹著作集第一巻 朝鮮史と日本人』、明石書店、1992 年、229 ページ。
- 12) 辛美善「在朝日本人の意識と行動—『韓国併合』以前のソウルの日本人を中心に—」『日本学報 (20 周年記念特集号)』(大阪大学)、1996、44 ページ。
- 13) 前掲、『朝鮮終戦の記録』4, 12 ページ。
- 14) 以上の記述の詳細は、前掲「朝鮮居留地における日本人の生活態様」を参照。
- 15) 尹健次「植民地日本人の精神構造—『帝国意識』とは何か—」『思想』No. 778、1989 年 4 月号、7-8 ページ。
- 16) 前掲、『梶村秀樹著作集』194 ページ。
- 17) 同上、211 ページ。
- 18) 小田倉徳寿『朝鮮の過去現在及未来』近澤印刷部、1929 年、109-111 ページ。
- 19) 前掲、『在朝日本人の社会史』17 ページ。
- 20) 「札幌民衆シリーズ 8」編集委員会編集『証言：植民地体験ポンソンファ (鳳仙花) —日本統治下の朝鮮・サハリンの生活—』札幌郷土を掘る会、1997 年、75 ページ。
- 21) 親しく接した朝鮮人がおり、それとの関係が近所の人であると回答した
在朝日本人によれば、それらの職業は「銀行員、新聞記者、医者、大学の先生、写真業、地主」(1931 年生、女) であり、総じて当時の朝鮮社会の中では生活の豊かな階層に属している。
- 22) 『旧植民地教育史資料集 2』青史社、1982 年、『朝鮮教育要覧』114 ページ。なお、本資料集は朝鮮総督府編『朝鮮教育要覧』(大正 8 年刊行) 及び釜山教育会編『釜山教育五十年史』(昭和 2 年刊行) の合本複製である。以下、引用した方の書名のみを記し、ページ数を表記する。
- 23) 同上、『朝鮮教育要覧』123-126 ページ。
- 24) 同上、『朝鮮教育要覧』119 ページ。

- 25) 同上、『釜山教育五十年史』38 ページ。
- 26) 同上、『釜山教育五十年史』1, 38-39 ページ。
- 27) 同上、『釜山教育五十年史』47-48 ページ。
- 28) 『幻の名門校』520 ページ（下線部筆者）。
- 29) 前掲、「朝鮮居留地における日本人の生活態様」392 ページ。
- 30) 『幻の名門校』355 ページ。
- 31) 『幻の名門校』450-451 ページ（下線部筆者）。
- 32) 『幻の名門校』462-463 ページ（下線部筆者）。
- 33) 『幻の名門校』238-239 ページ。
- 34) 『幻の名門校』373 ページ。
- 35) 『幻の名門校』375 ページ。
- 36) 『幻の名門校』521 ページ。
- 37) 高吉熙『(在朝日本人二世)のアイデンティティ形成—旗田巍と朝鮮・日本』桐書房、2002年、285 ページ。
- 38) ここで筆者は在朝日本人二世の意識構造を理解する際に、「植民地マイナス (-) 意識」と「植民地プラス (+) 意識」というタームを用いる。このタームは従来しばしば用いられた概念とは異なっている。すなわち、これまででは自分を一人の日本の植民者（加害者）として位置づけ、その植民地統治を否定する論理を示す言葉として「否定論」あるいは「植民地否定論」という言葉が用いられた。しかし、在朝日本人二世の意識を見た場合、そうした否定論に加えて、自分の存在を植民地時代の被害者として捉え、それゆえ植民地統治そのものを否定する立場を持つものがある。つまり、その力点は歴史的評価という意味での否定に置かれているのではなく、自己が被害者であるということからくる否定に置かれている。このため、そういう論理・意識を持つものに対するタームとして「植民地マイナス (-) 意識」という言葉を充てる。そして同様に、「植民地プラス (+) 意識」とは、植民地当時そのものを肯定する従来の「肯定論」あるいは「植民地肯定論」に加え、植民地統治そのものについてはネグレクトし、自分の存在がそこにあり、そこで育まれたこと自体をもってしてその時代を肯定する論理・意識を含めたタームとして「植民地プラス (+) 意識」という言葉

を充てる。ここには植民地統治を肯定・否定する論理の中で、植民地統治そのものの評価を考えているのか、それとも自分自身の経験・実感を第一にし、それを植民地統治の評価と連動させようとしているのかを区別して考えたいという意図がある。

- 39) 『幻の名門校』534-535 ページ (下線部筆者)。
- 40) 『龍頭山』10号、12 ページ (下線部筆者)。
- 41) 『龍頭山』10号: 14-15 ページ。
- 42) 『幻の名門校』535-537 ページ (下線部筆者)。
- 43) 前掲、『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成』284 ページ。
- 44) 川村邦光「植民地体験と“内地人” — 『アカシアの大連』をめぐって」
栗原他編『越境する知 6 知の植民地: 越境する』東京大学出版会、2001
年、109-111 ページ。
- 45) 『龍頭山』4号、2 ページ。
- 46) 『龍頭山』9号、17 ページ。
- 47) 『龍頭山』15号、11 ページ。
- 48) 『龍頭山』15号、9 ページ。
- 49) 『龍頭山』7号、3 ページ。
- 50) 『龍頭山』2号、3-4 ページ。
- 51) 『龍頭山』14号、13 ページ。
- 52) 『幻の名門校』475 ページ。
- 53) 前掲、『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成』286 ページ。
- 54) 例えば、次のような文章からそのことが伺われる。

「[...]」ところで、ソウルオリンピックへ主人と行きました時、少し韓国語を勉強していましたが、その時主人から『君はどうしてハングル文字を知らないの？生まれ育ったのに』と云われました。現在帰国子女が英語がよく話せるのと思ったのでしょうか。『あの頃は市内にハングル文字の看板もなく、日本人の学校と朝鮮人の学校も別々だったのよ』と云うと、『そんな差別をしていいのか』と云われた時、胸グッと来るものがありました。近くて遠い国と云われていますが、近くて近い国になる事を願います。何故ならば、私達の故郷ですもの』『龍頭山』8号、14 ページ。

55) 前掲、『梶村秀樹著作集第一巻 朝鮮史と日本人』241 ページ。

56) 同上、242 ページ。

(hothotdragon@hotmail.com)